

# 世界をみつめて3

## 「マルチとバイ」

石栗 勉

25年余り前に、私はジュネーヴの日本政府軍縮代表部に配属になった。そこでは昼食になると、縦、横、斜めなど意味不明の言葉が飛びかっていた。縦は和食、横は横飯で洋食、斜めは、どこにも属さないのが中華だったが、何となく分かるではないか。私はといえば、一昔前の文明論の定義に従えば、伝統を守り動かない勢力、すなわち「土着派」であり、当然に縦党であった。私が邦字紙を読んでいると、悪友が「新聞も縦ですか」ときたのには閉口した。

なぜこんな話を始めたかと言えば、世の中ではグループ分けが浸透していることだ。社会に出て企業、政府などに入ると、自らの希望、能力に関係なく組織の関心、戦略が優先し何等かのグループ（通常は「課」）に振り分けられる。最初の10年ほどは異なる分野で修行をさせ、そのあと専門分野、畑が何となく決まってくる。

外交の仕事を大きく分けると、例えば日印関係などの「二国間 (bilateral) 外交」、そして世界的な広がりのある問題を扱う「多国間 (multilateral) 外交」がある。英語の頭文字をとって前者をバイ、後者をマルチと呼んでいる。上記昼食の区分よろしく、また性格的にも私は疑いなくバイの人間であるのだが、気がつけばいつの間にかマルチ要員になっていた。結局、軍縮一筋の人生になった所縁であろうか。

マルチは国際会議でいかにして国益を反映させるかという仕事だ。地味だし、日本人は完璧主義教育のせい、マルチは未だに苦手ではないか。ジュネーヴの軍縮代表部に在勤中は、化学兵器禁止条約交渉が華やかなりし頃で、休みなき作業の中で、日本の国益（平和目的化学産

業への影響を抑える）を念頭においての行動だった。交渉は、ある国の提案で予想外に進んだり、表現を巡って終わりなき対立があったりと単純ではないが、私は、質問したり発言するなど日本の存在を認識させるよう努力した。

また、長くなってくると交渉経緯などを熟知して、走りすぎないとも限らない。亡くなった私の先輩は、これを「マルチ麻薬論」と称していた。例えば、我が国の同盟国の代表団員は、昨日まで全く無縁の人が専門分野や、幸い英語で通じることで雇われ、初日から自信をもって発言するのだ。それが過去のその国の立場から外れているし、また国務省とペンタゴンの代表間で見解の隔たりもある。当方は、これを知りつつ、矛盾点について意見を述べ、照会すること数回に及んだ。これは「いじめ」ではなく、説明の機会を与えようとの老婆心なのだが、後日その同盟国の大使から「最近貴代表団には威勢のいい外交官がいて——」と苦言ともとれる発言があったと聞いた。我が方大使の反応は「その調子でよい」であった。

マルチは、国連などは191カ国を相手にするわけで、黙っていると物事が決まってしまう。後年、アジア太平洋平和軍縮センター所長として、取りまとめ役になると、常に発言、質問する代表団員に注目し、合意を阻止させないために非公式に協議した。こうなったらしめたものである。良い意味で目立つことが重要だし、若干走りすぎても結構だ。互いに信頼関係を築いていれば大丈夫である。

いしぐり つとむ（教授・軍縮管理・軍縮）